第一編　総　説

村のはじまり

世界のあこがれである富士山は、静岡県と山梨県に跨っていて、山梨県側は通称「北富士」と呼ばれているが、その北富士部分の山体を一部占める市村は、富士吉田市および上九一色・鳴沢の二村である。

しかも富士山頂まで行政区域を持つのは富士吉田市と鳴沢村の二市村で、さらにその領域の広いのは鳴沢村である。つまり鳴沢村は富士山に最も近い村という誇りのある村である。

富士山頂をもって静岡県と境する、県境の村であるが、東は富士吉田市、南都留郡の河口湖町、勝山村、北は足和田村に接し、西は西八代郡上九一色村に村境を持って、海抜九八〇〇㍍の地点に鳴沢および大田和の二つの集落をつくる村である。

往古は富士五湖を結ぶ大きな沢の部分に位置していたため、富士の噴火による鳴動が響き渡るところから「なるさわ」と呼ばれ、文字も「鳴沢」または「成沢」が充てられ、これが村名の由来とされているが、この説には少々疑問がある。

民俗学的に考察するならば「なるさわ」の呼び名は「ナラヒ」「ナライ」「ナルイ」「ナレイ」などと、地域によって多少の変化はあるが、山の嶺の側面と並行して吹いてくる冬の季節風の呼び名に基づいて、名づけられた地名ではないかと思われる。つまり「ナラヒ」とか「ナライ」とかが吹き抜ける沢という意味であると考えたい。

村の存在は『万葉集』や『続古今集』に、すでに「鳴沢」の文字で歌に詠まれているので、かなり古い時代に誕生していることが認められる。

貞観六年（八六四）富士山の活動が盛んになったころ、麓にあった大湖は流出した溶岩で分断され、本栖・精進・西の三湖が生まれ、一方桂川につながる大田川は、剣丸尾溶岩流のため埋没して河口湖の誕生を見たとされているところから、現在の鳴沢村周辺は大きな地形の変動があった。

しかし富士山の噴火活動が徐々に鎮静化し集落が次第に定着していって、武田信虎・晴信（信玄）・勝頼の時代には村落として確実な存在となっていた。

天正十年（一五八二）武田氏が滅亡したあと、徳川氏の支配下に属した、天正十九年に豊臣秀吉が全国の戸口調査をしたときの内容によると成沢屋敷十八軒、大田和屋敷八軒とある。もちろん屋敷と呼ぶ家は村内でも有力者の家ということでこのほか百姓町人の家もあったことであろう。ともかくこのような状況のまま、明治四年までのおよそ二百九十年の間、鳥居元忠・秋元泰朝・富朝・喬朝の三代および、江川太郎左ェ門などの支配を受けて明治維新に至り、明治新政府の治政では、明治五年に都留郡第五区に属した。

村制施行当時

その後、鳴沢村に隣接する大嵐村・長浜村・西湖村の四ヵ村と組合村を構成したが、明治二十二年の町村制実施により組合村を解いてから、大嵐村と合併して鳴沢村の誕生を見たが、再び明治三十二年に大嵐村と分村して独立し、現在の鳴沢村の出発点となった。

現在の鳴沢村が明治二十二年に大嵐村と合併して一村を形成した当時の村の状況は、明治二十五年に山梨県が編さんした『山梨県市郡村誌』の記録によると、おおむねつぎのようであった。

まず村の位置・地形などの記述には

東は勝山村と接し西は丸尾中において上九一色村の精進・木栖両組と界し、北は富士山の北麓ダンノ山天神峠を

以て西湖村に界す、東西約一里二十八町（およそ四・五キロメートル）南北三十町（およそ八キロメートル）

山梨県庁より東南約十一里（およそ四十四キロメートル）勝山村へ一里二十八町（およそ四・五キロメートル）上九一色村精進へ約三里（およそ十二キロメートル）南駿河国富士郡堺へ四里（およそ十六キロメートル）北方西湖へ約三里（およそ十二キロメートル）

北に足和田山を負ひ、東西南は三面富士北麓の原野域内やや平坦なるも、運輸最不便なるを以て百貨欠乏せり

土地色黒真土砂交り二分、野土五分、石地三分にして地質悪し、麦・粟・馬鈴薯・トウモロコシ・ソバ等適す

とある。

こうした村の中は畑二百七町一反三畝三歩というからおよそ二百七ヘクタールの畑地のほか、切替畑百九十四町三反（およそ一九四ヘクタール）、この切替畑というのは焼畑農業で開拓した畑であるから、おもに山地の畑である。それに林地が百二町八反七畝二十一歩（およそ一〇三ヘクタール）芝地百五十七町四反八畝六歩（およそ百五十七ヘクタール）、それに宅地十町九反七畝五（およそ十一ヘクタール）という構成で、総反別は六百七十二町七反六畝五分（およそ六百七十二ヘクタール）となっている

したがってこの村には水田がまったくなかったことになり、明治中期の時点では米の食えない貧しい農村であった。このころこの村の戸数は二百六十一戸、人口は本籍のあるもの男六百八十六人、女七百五十五人の合計千四百四十一人（他へ寄留のもの六十二人、他から寄留したもの三十三人）であった。

村人たちは富士北麓の日陰の土地を精いっぱい開拓して細々と暮らしを立て、農業を主な生業としていたが、ほとんどは兼業農家で、農業の傍ら養蚕を営む者二百二十五戸、商業二十四戸、工業二十一戸が業種の内訳であった。

貧しい村であったから子どもたちの教育も十分にできないのは当然で、鳴沢組のうちに鳴沢尋常小学校が設立されたのは、明治二十五年で、小学校敷地面積も五十六坪、建坪三十坪の校舎に児童は男五十三人女一人計五十四人、また長塚地内の長塚尋常小学校は、男四十人、女三人の計四十三人という状態であった。ともかく以上のような寒村の

まま、明治・大正・昭和時代、さらに二十年ごろまでという変転極まりない時の流れの中に耐えた。

この間取り立てて村が世間の話題となったことといえば、日本の軍国主義時代に行われた徴兵検査で、もっとも優れた体格を持つ者に与えられた「甲種合格」の合格率で日本一の名誉（当時としては）を得たことであった。その理由は水田を持たない村である故に常食としてトウモロコシを食べて育ったことにあるといわれた。

しかし半面、甲種合格者が多いことは徴兵される率も多かったため、太平洋戦争中の戦死者も多く出したという、不幸な現実も伴ったことにもなった。食糧のことといえば太平洋戦争中、食糧管理法の施行により、全国的に食糧の配給制度が実施された折、配給米として受けた米を少ないものから初めて主食の中へ組み入れることができた、という皮肉な現象のあったことも語り草のひとつになっている。

戦後の発展

現在富士山および富士五湖をめぐる観光地として、日本国内ではもちろん世界中から注目とあこがれの的となっている。富士北麓の中で、もっとも多くの観光資源を持っているのは鳴沢村であって、この村では恵まれたこの観光資源を基調として、戦後いち早く観光立村を打ち出し行政と住民が一体となってこれを推進したことから、めざましい進展をとげ、活力ある現況と未来に向けて限りない夢をはぐくんでいるところである。

戦後その第一歩を踏み出したのは、昭和三十七年前後からで、明治二十二年の村制施行以来実に七十余年の後である。昭和三十年代から四十年代前半にかけて、日本の経済が高度成長の最盛期に入り、観光ブーム・レジャーブームが巻き起こったことから、観光立村の施策に拍車をかけ、一方恩賜県有財産の管理分収の恩恵もあって、長年貧しい農村に甘んじていた鳴沢村は、一躍豊かな住みよい村となった。

昭和三十年後半からの伸びゆく村勢を振りかえってみると、かつて想像もできなかったかがやかしい実績がうず高

く記録されている。

昭和三十八年、躍進する鳴沢村は将来に向けて村の総合開発計画を樹立し、㈠水資源の開発　㈡観光開発　㈢農業立地条件整備　㈣林業の振興　㈤工業立地条件整備（工場誘致）の五本の柱を立て、これを具体的に実現するための施策に取り組んだが、従来はほとんど対外的な振興策がなかったため、新しい施策に取り組む村役場は、これに応ずる機能を備えていないという観点に立って、まず村役場の新築から手をつけていった。

当時の村役場は、明治二十二年七月一日に村制が施行されたとき、その前月の六月二十七日に山梨県会をもって大田和区に設置されたものを、明治三十二年五月十六日、県告示による分村が決定して、鳴沢区字水上に移し（明治三十六年）て以来、村政の拠点となっていたもので、荒廃もひどく能率的にも不都合であったので、早くから村議会では新築を促していたところであった。

新庁舎が完成を見たのは昭和三十八年二月十六日で、この喜びと同時に新しい村の新しい進路はいよいよ具体化されていった。

ちなみにこの時点での村の人口と世帯数は、世帯数で四百三十三戸（明治二十二年ころ二百六十一戸）人口二千三百十六人（明治二十二年ころ千四百四十一人）でいずれもほぼ二倍の数に増加している。

しかし村民の業種別世帯および人口は依然として農業主体であり、全世帯数の六〇パーセントは農家戸数が占めている。農業以外では公務員、会社員などいわゆる月給取りという業種で、全世帯数の割合では二〇パーセント、全人口の割合で一八パーセント程度であり、製造業・商業・サービス業・林業・建設業などはごくわずかな数で古くからの農山村の域を脱していない状況である。

文化のバロメーターともいわれる機動力保有数も極めて貧弱で、普通乗用車十一台、トラック十九台、小型四輪四

十二台、自動三輪四十五台、テーラー十一台、バス一台のほか原動機付自転車百十七台という程度である。

また家庭用文化器機でもテレビは百九十二台（二・二世帯に一台）電気洗濯器二百三十五台（一、八世帯に一台）、電話四十六台（九・三世帯に一台）冷蔵庫二十台（二十一・五世帯に一台）といった普及率の低さであった。

また道路の状況も村の北部を通過する国道一三九号（延長六、四〇〇㍍）は、全線舗装されているものの村道は全く舗装されていず、観光立村とは名ばかりであった。このため村では、村民の文化的向上の施策と同時に、富士山および富士五湖周辺の活性化に対応するための事業を積極的に推進することになった。

富士スバルライン開通

昭和三十九年四月一日、待望の富士山有料道路（スバルライン）が開通し、世界のあこがれである富士登山は画期的な時代を迎えた。

スバルラインのコースは、河口湖町地内から富士山五合目までであるから、鳴沢村には直接関係のないもののように思われるが、これは実は村の繁栄に大きな影響をもたらしたものであった。

スバルラインの入口に当たる河口湖町船津と、鳴沢村を通る国道一三九号とは、船津を接点として結ばれているため、スバルラインを訪れる観光客は隣接する鳴沢村の、恵まれた大自然を見逃がす筈はない。富士山がもっとも美しく見え、その裾野に広がる世界屈指の大自然林として知られる青木ヶ原樹海、それに国道と連結する主要地方道富士宮鳴沢線が静岡県との交流を促すことになると、いよいよ高度経済成長の波に乗って活発化してきた。自然とのふれあいを求める人々にとって、ここは未来に向けて限りない可能性を抱いている楽土となる。

そこで村では富士スバルラインと関連する観光施設の充実や新規観光企業の誘致などに本腰を入れはじめた。

富士北麓の観光開発が急速に進展して、県でも積極的にこの一帯にテコ入れをはじめた結果は、明治百年記念事業

の一環とした国の東海自然歩道の誘致、昭和四十二年の新御坂トンネルの開通、さらに中央自動車道富士吉田線の開通（四十四年）甲府精進湖有料道路の開通（四十八年）などと、県都甲府と富士北麓を、距離的にも時間的にもめざましい短縮を図る諸事業の実現となった。

このような交通網の近代化は、とりもなおさず鳴沢村の近代化にも大きな促進剤となったのである。

青木ヶ原の樹林と続く大草原のごく片隅に細々と息づいていた鳴沢村が、新しい時代の風の中で胸を張って観光鳴沢を誇れる時代が、確実に訪れたのである。

当時整備された交通網で鳴沢村までの所要時間は

○ＪＲ線と富士急行線を利用した場合　東京―大月（ＪＲ線）二時間　大月―河口湖間（富士急行線）一時間　河口湖―鳴沢（バス）二十五分　合計三時間二十五分

○中央自動車道利用の場合

東京―河口湖間（中央自動車道富士河口湖線）一時間三十分　河口湖―鳴沢間（バス）十分　合計一時間四十分

○静岡方面からの場合

富士―鳴沢間（バス）二時間

といったものであった。

世情がめまぐるしい変遷の時、大都会に住む人びとにとって、騒音と大気の汚染と、ゆとりのない労働条件から、一ときであっても解放されたいという欲求は、大きなエネルギーとなって、自然美の豊かな環境へ逃避することが盛んとなって、手軽に求められる憩いの場としての条件を持っている鳴沢は、名実ともに観光の鳴沢となっていくのである。

村の人口内訳を見ても明らかのように、昭和三十年代には二十人弱しか数えられなかったサービス業は十年間に百六十八人と飛躍し、卸小売業の五十人も九十人に増加、製造業の七十人は百二十人となり、その分千五百人を数えた農業人口は七百人に減少するという、第一次産業が、二次・三次産業への転換をめざましくしている。

また総人口の上では横ばい状態であっても、世帯数の面ではおよそ三十世帯が増加し、全体的に活気溢れる内容が示された。

しかし農業人口は減少したとはいえ、この村の特性は観光農業に大きなウエートがかけられているため、人口減の分は近代農業、機械化農業で補い、依然「野菜づくりでもつ鳴沢農業」のイメージは、以前にも増して高められ、とりわけダイコン・キャベツの生産では、作付面積も昭和三十年代に二十ヘクタールそこそこであったものが、四十年代にはダイコンの場合百ヘクタール、キャベツの場合は百十ヘクタールと急激な上昇を見せ、動力農用機械も耕うん機百五台、噴霧機二十六台、撒粉機六十二台、農用トラック百十七台と極端な増加を示した。

また広い地域にわたって牧畜の条件を整えているこの村では、これも観光施策の一環となる乳牛の飼育にも力を注ぎ、昭和二十二年にはただ一頭を数えたものが、四十年代には百頭を超える数となり、ここでも活気のある村の勢いを見ることができる。

さらに観光鳴沢の伸展をもっとも顕著に表わしているものとして、みやげ品店の進出に見る伸びである。昭和三十七年に示された村内年間総販売額はわずか四千万円程度であったが、四十三年には二億六千万円程度にふくれあがり、そのうちみやげ品ほか小売店の占める割合は五六・五パーセントである。

いかに観光事業がこの村を支えてきたかがこの数字でも知ることができよう。

一方、教育文化の面でも昭和三十五年から四十年前半にかけて充実に力を入れ、昭和三十二年に小学校校舎の増築

を皮切りに、同三十五年に鉄骨造りの体育館、三十八年には調理室および食堂、三十九年には食堂の増築、四十三年にはプールの完成と、この時期かなりの成果をあげ、生活文化を代表するカラーテレビの普及率では四十三年の時点で二十三台を数え、県内の普及率三・一パーセントに対し、鳴沢村では五・三パーセントという高さを示すようになった。このほか白黒テレビを含めたテレビ保有率も、十年前に比較して二倍強（一・三世帯に一台）電話も三・五倍の百六十七台（二・八世帯に一台）自家用乗用車は八七台（五・三世帯に一台）といった飛躍ぶりを見せている。（自家用乗用車を含む軽四輪以上の車を保有する戸数三百二十五戸）もちろんこれ以外の電化製品の保有率は、十年前とは比べものにならない進歩であり、プロパンガスの普及も同時に広まって、村内全戸数の九三・六パーセントに達した。

昭和五十年代に入って人口は横ばい状態であるが世帯数はさらに増加して十年前に対して五十戸は増加している。これは観光地として生きられる諸条件が整備されたこと、村民の他所への流出を防ぐ対策として企業の誘致に力を入れたこと、および観光産業従事者が県外から移入して定着したことによるものである。

したがって村政全般にわたって、あらゆる面で規模の拡大が必要となり、村の総予算面でみても昭和四十三年度で八千四百万円という額が五十年度に入ると一躍二億円を超す額となっている。

時代の要求はさらに、鳴沢村を単に通過観光の場に留めることなく、恵まれた自然を活用しての民宿および別荘地として、県外からの利用者が激増してきたことから、これらに対応する上水道の設備充実が必至のものとなり、昭和四十年度当初の紅葉台上水道組合の認可設立を皮切りに、以来各地の工事がすすめられ昭和五十年までに、計画給水人口一日六千人に対しおよそ二千五百人分の施設が完了した。

村のおよそ八〇パーセントを占める山林原野（うち県有林八四パーセント民有林一二パーセント村有林四パーセント）と、霊峰富士山、およびその裾野に広がる五湖とがかもし出す自然景観は、戦後の観光ブームに乗って人びとの魅力の対象となったことから、これ

に活路を見出した村人の積極的な村おこし活動と、これを支えた村政の堅実な歩みは、こうして各部門にわたってめざましい発展をとげ五十年代には、住みよい明るい、そして豊かな鳴沢村としての評価を、県下に示すまでとなった。

新しい顔、たくましい活力

昭和六十年代に入ると交通の便はさらによくなって、首都圏へも東海圏へも六十分という短距離（時間）となり、中央自動車道の全線開通や東富士五湖道路の整備は、いよいよこの村を全国的に知らしめる大きな役割を示してくれるようになった。

古くから勤勉でまじめな人柄を持つ鳴沢村民は、このような画期的進歩にも有頂天になることなく、祖先が培った村の伝統を守り、失えば取り返しのつかない自然を自らのものとして保護し、その上に立って二十一世紀への新しい道を慎重にさぐっている。

そのずっしりとした力は、いよいよ豊かな村づくりの原動力となって、人びとのあこがれの地を未来に引き継ぐことができるまでとなった。

村内いたるところに造成された「ふれあい施設」は、その「よき村鳴沢」の偽りない姿でもある。

（農業）

さきにも記したように、観光鳴沢はその美しく豊かな資源を、さらに保ち続けるために森林の保護と高原野菜を軸とする農業の振興に力を注ぎ、冷涼多雨の年平均気温一〇度Cの自然環境を生かしたキャベツ栽培にはもっとも多くの知恵と努力を傾け、これにつぐダイコン・スイートコーン・ホウレン草を農業経営の基幹作物として、その作付面積も百三十㌶となり、また農政の転換による休耕田が近隣市町村にある点に目をつけて、これを借り入れした出作百六㌶も含めた、一大野菜産地化に成功している。

もちろんこの生産物は村内需要ばかりではなく、県内各地は当然のこと整備された道路網をフルに活用して、京浜、静岡、中京地域へも出荷されている。

（林業）

農業につぐ林業も荒廃地の改良や植林の努力によって村面積の九〇・六パーセントを占める、県下でも有数の林業村となった。山林の八五・三パーセントは県有林（恩賜林）であるが、この保護管理は村および鳴沢村ほか一町二カ村恩賜県有財産保護組合が当たり、県の貴重な財産を守り、村有林・民有林も含めて景観保全や資源の保護育成に努め、本格的林道であるかやっけ・大田和林道（延長四一三八㍍）も、昭和五十七年三月全線開通をみた。

今後は林地利用の複合的構造を考え、さらに林道網を整備するとともに、長期的に林業施策の向上発展を図り、自然休養林の造成などをめざしながら、自然保護・国土保全・水源涵養などの面で多目的な機能を果たす山づくりに力を入れていくことになっている。

（商業）

交通の便がよくなったことと、自家用車の普及などで中心都市への買い物も多くなったがこうした世情に対応して村内の商業者も、近代的な経営を取り入れ、現在では日用品雑貨および食料品などはほとんど村内で購入できるようになり、卸売業を含めて五十店の商業者に百八十人程度の従業員を数えるようになった。

（工業）

地域の特性を生かした木材関連工業が主で製材・建築材・チップなど、企業数は二十一を数え、村内の事業所の八八パーセントがこの業種で占められている。

また木材を加工しての家具類も生産されるようになり、将来的にこれは飛躍が期待される産業のひとつである。

このほか多年懸案とされていた工場誘致も電子関係が昭和五十八年に操業開始となり、これからも産業構造に大きな影響をもたらすものとされ、若者の村内定着が促進されて活力がさらに充実するものと期待がかけられている。

（豊かな村民のくらしに向けて）

大自然の恵みの中で、明るく豊かに生きられる環境整備は新しい顔として売り出している村にはことさら重要な課題である。

その第一としてすでに手がけていた水資源の確保および開発は、早急にすすめなくてはならない施策である。現在上水道は一〇〇パーセントの普及率となっているが、村民の生活水準が急激に向上したこんにち、水の確保と施設は常時施策の中心としていかなくてはならない。

生活水準が向上すると同時に環境整備の面で考えていかなくてはならないものにゴミ処理の問題がある。優れた観光地として自負する以上、これにも真剣に取り組み、可燃物は週一回不燃物は月一回のステーション方式で収集し、新設された青木ヶ原ゴミ処理センターで処理されているが、この村の場合は村内の住民の出すゴミ以外に、観光客の出すゴミ類も相当量に達しているため、今後これに対応できる施策はますます必要となるものと考え、これまた重要な施策のひとつである。

つぎに道路の整備である。村内の幹線道路は早くから整備されたが、村内の生活環境の変化および、観光面への対応などから、道路整備は引き続いてすすめなくてはならない。このため村では毎年地域発展の足がかりとして総予算額の二〇パーセントを道路整備に当てる一方、国および県にも要望して自然保護をすすめながら道づくりに成果をあげている。なお、現在までに集落内の道路の舗装率は九七パーセントとなった。

二十一世紀をになう子どもたちの教育も怠ってはならない。そこで小学校の施設には特別気を配り、昭和五十六年

完成した新校舎は、鉄筋コンクリート二階建て、総面積二千二百八十八平方㍍で、子どもたちの安全性は特に考慮された。一方、個性を尊重し創造力を養う教育現場としての各種設備を行っているが、とりわけ音楽教育でのＬＬシステムの導入は、県内でも数少ない設備として評価されている。

また中学校は河口湖町にある組合立河口湖南中学校を教育現場としているが、ここまでかなりの距離があるため、学校組合ではスクールバスを購入し、中学生たち（およそ百人）の学業に支障のない方途をとっている。

子どもたちの教育と合わせて、社会教育の面でも、ふるさとづくり運動を中心として、体育・文化の両面にわたっての事業を行っているが、その拠点となるところが総合センター（老人福祉センター・中央公民館）鳴沢・大田和の両公民館、および昭和五十六年に建設された鳴沢勤労者体育センターおよび村民グラウンド、そのほか大田和スポーツ広場・ジラゴンノグラウンドがある。

村中が心を合わせて働きかつ学び、そして思い切りふれ合う、そうした言葉どおり鳴沢は家族的な村である。この限りない活力を二十一世紀に贈り届けようと、いまみんなの笑顔が未来を見つめている。お年寄りは現在村を支えている少青壮の生きる地盤をつくってくれた尊い先達である。感謝といたわりを忘れてはならない、そうした基本的精神に立って村では早くから老人福祉をすすめ、全国でも一番先に老人年金を支給しはじめた。この村は長寿村として全国的にも知られているだけに、老人の層も厚く七十歳以上の者は全人口の一六パーセント程度を占めている。村では〝福祉のきずなをより太く、心のきずなをより多く〟を老人福祉の基本方針として、老化しない高齢者づくりに力を入れている。

こうして老化しない高齢者づくりをすすめるためには、当然幼児から成人に至るまでの人たちの健康管理が必要である。そのために行われている施策のひとつに、全住民の健康管理台帳を作成し、医療機関との連携を保ちながら、

食生活の改善・成人病の予防・一般の健康診断や防疫など、積極的に実施し、特に村の母子愛育会の協力を得て、〝すこやか鳴沢〟を育て続けている運動があり、その拠点となる保健センターも昭和六十二年に完成をみた。

このほか、不安のないくらしを守る消防活動は、昭和四十七年に発足した広域消防の富士五湖消防組合の傘下にある八十余人の団員が、常時地域の安全と防災に努め、地域の人びとの信頼のもとに活動をすすめている。また若い力の集団はよりよいふるさとづくりのために一翼を担って、特に祖先たちが残し伝えてくれた伝統芸能や、歴史的遺跡の保存など、自分たちの責任として真剣に取り組んでいる。

若い人たちの熱心な村おこし活動に呼応して婦人会の活動もめざましく、特に〝村民のふれあいは婦人会の手で〟という力強い合言葉で明るい環境づくりの立役者となっている。鳴沢村はいま以上のようなすばらしい村となって、そこにそびえる日本一の山富士山のように、県内外の人びとのあこがれの的となるだろう。

遠い日の日陰の村のおもかげは、もうどこにもない、はつらつとした村人の顔は、二十一世紀に胸を張って第一歩を踏み出すことのできる、すばらしい活力に溢れている。

現在の村の概要

村の位置・富士北麓で集落のあるところの標高は、九〇〇㍍～一、〇〇〇㍍

年平均気温・一〇度C

年間降水量・一、六六〇㍉で主に夏季に集中する多雨

気候・冬の雪は比較的少ない。初霜は十月上旬、おそ霜は五月中旬、サクラの開花は四月下旬で甲府盆地より二十日程度おそい

ススキの開穂は八月中旬、秋の訪れは早い

村の世帯数昭和六十二年十月現在　七百三十八戸

村の人口　男　千二百五十五
　　女　千二百八十二　計　二千五百三十七人

（本文末尾カッコ内は執筆者）